

令和5年5月8日(月)から、新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付けが、「新型インフルエンザ等感染症(2類相当)」から「5類感染症」に移行されました。人出はコロナ前には まだ少し届かないようですが それでもほぼ戻りつつあるような状況ですが 今のところ 大きな混乱もなく 心配されていた感染増加も抑えられているように思えます。外出すると たまにマスクなしでおられる人も見かけますが ほとんどがまだマスクを付けておられるようです。

日本人の気遣いの表れでしょうか? 「自分も感染したくない」ということや「他人に感染させてはいけない」という自重、それとも「他人の目が気になる」集団行動で 現状維持をしようという気持ちの表れだと 評する人もいます。

(1)陽性時の外出自粛は個人の判断へ

(2)療養期間は発症翌日から5日間(推奨)

※同居家族の外出自粛も求められません。特に 5 日間はお自身の体調にご注意を

(3)発症後10日間はマスク着用など人にうつさない配慮を

(4)治療費に自己負担額が生じます(季節性インフルエンザ等と同等に健康保険で1割から3割負担)

(5)患者登録、健康観察等がなくなります

(6)無料検査が終了します(重症化リスクが高い者が多い医療機関や 高齢者施設での検査等は行政検査継続)

新型インフルエンザ等感染症(2類相当)と5類感染症の主な違い

	新型インフルエンザ等感染症	5類感染症
発生動向	<ul style="list-style-type: none"> 法律に基づく届出等から、患者数や死者数の総数を毎日把握・公表 医療提供の状況は自治体報告で把握 	<ul style="list-style-type: none"> 定点医療機関からの報告に基づき、毎週月曜日 から日曜日までの患者数を公表 様々な手法を組み合わせた重層的なサーベイランス (抗体保有率調査、下水サーベイランス研究等)
医療体制	<ul style="list-style-type: none"> 入院措置等、行政の強い関与 限られた医療機関による特別な対応 	<ul style="list-style-type: none"> 幅広い医療機関による自律的な通常の対応 新たな医療機関に参画を促す
患者対応	<ul style="list-style-type: none"> 法律に基づく行政による患者の入院措置・勧告や外出自粛(自宅待機)要請 入院・外来医療費の自己負担分を公費支援 	<ul style="list-style-type: none"> 政府として一律に外出自粛要請はせず 医療費の1割~3割を自己負担 入院医療費や治療薬の費用を期限を区切り軽減
感染対策	<ul style="list-style-type: none"> 法律に基づき行政が様々な要請・関与をしていく仕組み 基本的対処方針や業種別ガイドラインによる感染対策 	<ul style="list-style-type: none"> 国民の皆様の主体的な選択を尊重し、個人や事業者の判断に委ねる 基本的対処方針等は廃止。行政は個人や事業者の判断に資する情報提供を実施
ワクチン	<ul style="list-style-type: none"> 予防接種法に基づき、特例臨時接種として自己負担なく接種 	<ul style="list-style-type: none"> 令和5年度においても、引き続き、自己負担なく接種 ○高齢者など重症化リスクが高い方等：年2回(5月～、9月～) ○5歳以上のすべての方：年1回(9月～)

そして何故か今「インフルエンザ」が日本各地で流行しています。5月に入って宮崎県と大分県の高校でインフルエンザの集団発生が確認されました。いずれも約500人が感染するなど、インフルエンザの集団感染への警戒が高まっています。体育祭や 遠足などの行事の後 学校全体に広がった可能性があると言われています。

・海外からウイルスが流入している可能性 ・大きな流行が3年間なかった→免疫がない人が多い

・寒暖差が激しい→免疫力が落ちている人が多い との 医師の見解もあるようです。気を付けたいですね。

マルジン 6月のカレンダー

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	

<モノレールレンタル料(賃料)の一覧表>

「モノレールレンタル料(賃料)の一覧表」

本年4月に改訂されております。

ご入用の方は

マルジン (0778-27-7200)

まで ご連絡ください。

2023年6月第307回は～マルジンモノレール業のルーツ～について

先月末に とある会に出席するために 久々高速でなく 山岳地の県境を通り抜けました。そこは 福井と岐阜の県境で 30年余前にマルジンが初めて 農業用でなく現場作業のためのモノレール敷設工事をした始まりの場所です。モノレールと言えば みかん畑や お茶、水仙、梅などの収穫用に永設の設備として敷設したのですが…あるとき「調査会社」から電話があり「モノレールのリースはしていないか？」という内容でした。調査会社と言えば「与信調査会社」あたりは知っていましたが なんてモノレール情報??その当時「地質調査」なる業種は今ほど知られていませんでした。阪神大震災以降 建造物や山岳地での工事の前に地盤調査などが当たり前になってきましたが その当時 私たちはまったく知らない分野だったのです。

地質調査(ボーリング)を行う場合、調査を実施する現地まで調査に必要な機材を運ぶ必要があります。調査用のボーリングマシンを山岳地の指定ポイントに設置するには ゆるい傾斜であればクローラー、道路に面してクレーンで届くならクレーン車、急な頂上等は索道で機械を運んでいました。それが難しい場合は「人肩」での運搬です。「人肩」の読み方は?ひと-かた



【一肩】 1 駕籠(かご)などの一方を担ぐこと。 2 負担の一部を受け持つこと。
じんけんうんぱん
ひとかたうんぱん
(もっこかつぎ)
とか言われるそうです。これはもう読ん

で字のごとく、人が肩に担いで機材を運搬する方法です。一番原始的な方法で作業をする人の体力も使いますし危険も伴いますが、最後はこの運搬に頼らざるを得ない場合もあるのが現実でした。肩がとても痛くなりますし、二人の気を合わせコツをつかむまでは大変です。また、緩い傾斜地であれば、対応可能ですが、足場が悪いと転倒などの危険が伴う上、運搬効率も悪く、体に掛かる負担が大きいので、できるだけ他の運搬方法を選択したいところです。

ベテランの強者の方は『担いだ方が早い!』と言われる方もおられたようですが 事故の防止や作業する方の安全や健康はそれよりも優先すべきことです。

マルジンにご依頼のあった場所は急な傾斜が続く 東海北陸道の橋梁工事のある地点でした。モノレール運搬の強みは、既存の運搬路や道路がなくとも設置が可能なことと、急な斜面でも対応が

できることです。また一度レールを設置してしまえば、あとはその上を移動するだけなので、運搬に関しての労力はかなり低減され 日々の通勤も乗用台車を設置すれば乗って移動できます。しかし、運搬自体は楽に行えるものの、レールの設置は大変です。道なき道を進むため、調査地点までのルート選定が非常に重要になり、設置場所の草木の伐採も必要です。雨の日が多くても 最終完工日までには設置完了するために足場の悪い中 泥だらけになってレールと格闘でした。農業用で実績のあるメーカーでも段差のある急傾斜地を設置した経験は乏しく 当時はいろいろなことが手探りの状態でした。当時「6mのレールでしたので 山の中でカーブに合わせて曲げたりすると 回収する時に台車に積めない」「永設農業用の鋳物の金具は 工事用の過酷な使用に耐えられない」「支柱も細くて不安定、頑丈なものにしていこう」など 今でこそ重量物運搬用もありますが 当時はいろいろと工夫、改良が必要でした。また、「現場でモノレールが不調であればすぐに来てほしい」設置して「はい!納品!さようなら」というわけにはいかない責任、しかも「資機材の不備」「設置の不備」「使用ミス」が 人の命にかかわる大変な仕事だと感じました。敷設工事でも大変ですし「汚い、危険、きつい」では 若い社員が長続きしない過酷さもあります。そこで、レンタルと工事を切り離して 敷設工事を建設作業が得意な業者とタイアップしたほうが良いのではないかと模索したこともありましたが、しかし 大変な責任ある部分を他人頼みでは 胸張って「モノレールを業となすプロ」とは言えない そういう思いが大きく、マルジンの「販売・レンタル・設置・取扱講習・修理を一貫して事業となす」という方向性が 徐々に固まってきました。たくさんの人が重量物モノレールを日々利用される大きな現場で 本機のギアが破損した時 「早く修理してくれないと困る!!」と言葉荒く言われ泣きたい気持ちで 本機を分解修理 なんとか復帰できほっとしているマルジンマンに 「ありがとう、助かった」と最敬礼された時など お客様の方を向いた対応を忘れずに仕事を続けられ 人と人の繋がりや たくさんの感謝や 誇りになる言葉を頂戴できるありがたい仕事だと思える そんなきっかけになった現場もございました。昔の現場は もう橋梁やトンネルなど立派な道路が出来上がり はっきりとモノレールの始点がわからない状況です。今なら GoogleMap等で位置情報を正確に保存しているので 年数が経っても景色が変わっても位置がわかりますね。私たちも初心を忘れず 使われる人の「安全と使いよさ」を指標として後進に引継ぎ これからも取り組んでいきたいと思ひます。